

## 四 恩 抄

川奈から伊東にうつられた聖人は、伊東八郎左衛門尉朝高の屋敷にほど近い、玖須美の地の草庵に、流人の生活を送られたのであった。

伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐、これらの国々に流されるのを遠流といい、信濃、伊予を中流とし、越前、安芸をば近流という。と延喜式の文にあるといわれているが、これは京都を中心にしていったことである。ある書には、常陸国京より一千五百七十里、安房国一千一百九十里、佐渡国一千三百二十五里、土佐国千二百二十五里で、伊豆国七百七十里、隠岐国九百十里云々とあつて、この里数を計算すると大変に遠い感じがでてくる。

さて聖人の流罪にあたって、何故伊豆の地がえらばれたかということについては、どの本にも出ていない。伊豆は流刑の地であるから、一向に不思議とも思わず、それに言及しないのである。頼朝がひるが島に流されたのは有名な話であるが、ひるが島は百科辞典によれば、静岡県田方郡菰山村の大字。寺家じげの東方にある。その昔、狩野川がこの地を挾流して島のごとくなつてい

たので、ひるが小島というところ。島は島でも川の中の島である。

さて聖人の伊東流罪については、何故伊豆がえらばれたかを論じた御伝記書はないが、さすがに、現在の伊東市玖須美の仏現寺より発行された書物にはその理由が書かれてあるから、ここに転載しておく。私はこれを何時だったか読んで、真偽の程は別として面白いことだと思つていたので、筆記しておかなかったもので、どの書物で読んだのかを忘れてしまい、今回これをさがし出すまでに半年程、気にかけていて、やっとみつけ出したものである。

伊東市玖須美の仏現寺は、聖人が伊豆伊東配流中三か年、ご不自由の生活を遊ばされたご住居としての御霊蹟地である。その寺誌によれば、

「何が故に、流刑の場所を伊東に定めしかというに、伊豆の伊東がもつとも適當である理由があった。

当時の領主伊東朝高より三代前にさかのぼる伊東祐清の代に及ぶ。頼朝が源家の嫡流として未だ不遇であつた時、六波羅の管領で権勢をほこつた伊東祐親は、女婿たる頼朝を殺さんと計画した。この謀計を一族なる伊東祐清に応援を強いたが応ぜず、反つてこれを頼朝につけてこの危難を救うたのである。頼朝は祐清によつてことなきを得、深く祐清に報ゆることを期していた。その後、頼朝が天下を握り、鎌倉に幕府を興せし時、恩人なる伊東祐清を厚く用いて、その旧恩に報いんと篤く祐清を説きしも、これを潔しとせず、固辞してこれをうけなかつた。頼朝深く彼

の清廉なるを歎賞し、強いて報ゆるに伊豆伊東七郷を彼におくった。即ち聖人が流刑となつた当時の領主朝高（注 画讃によればこれはあさたかと読むよし、下にあるときはともと読み、上にある時はあさと音訓すとある）は祐清の孫である。頼朝の幕府は倒れ、北条の代にいたつた。故に伊東家の浮沈興廢は北条の手中にあつた。かかる実情があるが故に、鎌倉よりの嚴命は絶対的に盲従せざるを得ないのである。かかる関係を、監視嚴重を忠実になしとぐるには伊豆の伊東領こそ絶好の場所である」

以上が、仏現寺誌による、聖人伊豆伊東流刑の理由である。その当否はともかくとして、数百の伝記中にも書かれていないことなので、ここに転載して、他日の研究に供する次第である。北条氏の命令は絶対に盲従しなければならぬという朝高が、信者になつたのであるから、法華經の法力はありがたいといわざるを得ない。

「ヒマラヤの杉をぬきとつて

ベスビヤス火山の噴火口に入れ

その焰をもつて

大空に恋という字をえがく」

とかいったようなドイツの詩人ハイネの詩集を読んで、その形容の壮大さに青年の日に感激したことがあつたが、その同じ青年の日に、

「四大海の水を硯の水とし、一切の草木を焼いて墨となして、一切のけだものの毛を筆とし、十方世界の大地を紙と定めて、しるしおくと、いかでか仏の恩を報じ奉るべき」との四恩抄の一章句を読んだ時に、ハイネを驚倒させるこの雄大な形容に思わず、うむと、うなつたことのあるのを今もって忘れることができない。

その四恩抄は伊豆伊東御流罪中の弘長二年正月の著述で、聖人四十一歳の時である。

同じ弘長二年二月には、教機時国抄という大切な御法門を記述した書があるが、これはまた他日ふれることがあるから、ここでは四恩抄の大略を記述することにして、読者が聖人の御遺文を直接拝読することを切望するものである。

聖人は「そもそも流罪の身になりて候につけて二つの大事あり」と最初に書かれて、一は大いなる悦びと、第二には大いなる嘆であるといわれている。

大いなる悦びとはなにかといえ、仏さまが法華経を説くごとく行えば必らず難に逢うと、二千余年の昔、経文に説きおかれているが、日蓮は今、その仏さまの説くごとくに現在するのが悦びであるとされている。

このわれわれのすむ世界に生まれてくるものは、十悪の人びと、五逆罪を犯した人びと、賢人

聖人をののしつた人びと、父母に孝行しない人、僧侶をうやまわない人びとのみである。こういう人びとのみの集りであるから、仏様がこの世に出てこれに仏の道を教えても、仏様を毒殺しようとしたり、あるいは危害を加えようとするものばかりである。目連尊者は竹杖外道のために殺され、蓮華比丘尼はダイバダッタのために打ち殺された。智慧第一と言われた舍利弗尊者すら、クギヤリのために悪名を立てられ、アジャセ王は醉象を放つて仏を殺さんとしたのである。

仏さまが生きている時ですら、このような難があるのであるから、仏さまの亡くなった後の時代になれば、その難はますます多くなると、法華経には書かれてあるのである。

日蓮も最初に法華経の難きたるべしとの文を読んだ時には、本当に思えなかつたのに、今この伊東に流されてきてみれば、その経文が少しも間違いでないのがわかつたのである。

今の世の中では、妻子をもっている僧侶も、人の帰依を受け、魚鳥をたべる僧侶も人の信仰をあつめることができるのに、この日蓮は妻子も帯せず、魚鳥も服しないが、日蓮坊の悪名は天下にきこえ、この伊東のようなところにきてさえ（地頭、万民、日蓮をにくみ、ねたむこと、鎌倉よりもすぎたり、みるものは目をひき、きく人はあだむ。船守弥三郎御書）悪名がたつているのである。それは何故かといえ、法華経を弘めるといふのが、いけないということである。悪名がたつているのである。

自分程のものが、二千余年以前に書かれた法華経の文にのせられているかと思うとこんな悦び

はないのである。しかも法華經を信じるといつても年数の上からいえば僅かに六、七年位であり、学問や世間の用事にさまたげられて、一日僅かに一卷、一品、題目のみの時もあつたのに、去年の五月十二日に、ここ伊豆の伊東へ流されており、今年弘長二年の正月の十六日にいたるまで、二百四十余日の間は、昼夜十二時に法華經を修行しているのである。その故は法華經のために流罪に処せられたのであるから、寝るも起きるもすべて法華經を読み行ずるのである。

人間に生を受けてこれ程の悦びがあるであろうか。信心を上げようと心がけても、凡夫の習いとして一日十二時（とき）の中に、一時か二時かは励もうけれど、なかなかむずかしいものである。しかるにこの流罪の身となつてからは「思い出さぬにも法華經をよみ、読まざるにも法華經を行ずるにて候か」と思うのである。謀叛を起して流罪になつた人びとは多い。強盜、夜討などの罪によつて流罪になつた人びともある。しかるに法華經を弘めるといふことが理由で、流罪になつたものは末だ一人もおらないのである。昼夜十二時の法華經の持經者は末代にもないであろうと思つ。

そもそも佛法を習う身には、必ず四恩を報じなくてはならない。四恩とは、一に一切衆生の恩、二に父母の恩、三には国王の恩、四には三宝の恩である。

今流罪の身となつて、末代にもあいがたき法華經の持經者とたつたことは、この四恩を報ずるものとして、これ程の悦びはないのである。この悦びにつけて、大いなる歎きがあるのである。

法華經に「もし悪人あって不善の心をもつて一生涯中仏さまの前で仏をののしつたとしても、なおその罪は軽い。もし人が在家出家を問わず、法華經を誦する者をたつた一言でも悪口を吐くならば、その罪ははなはだ重い」と書かれてあるのである。日蓮はこの經文をみて、両眼より涙を出すこと、雨のごとくであった。何故ならば「我一人この国に生まれて多くの人をして一生の業をつくらしむることをなげく……」

聖人は大いなる喜びを身を感じるるとともに、聖人の真意を知らず、聖人が法華經の行者であることを知らない不信の人びとに、なげきを感じながら、伊豆の伊東に流人の生活を始められたのであった。

